



アメリカ農業の真面目さに学ぶ



今年の8月末、一週間の日程でカリフォルニアの農業地帯を視察した。ほんのわずかな人々との交流や駆け足で回る旅程であったが、それでもアメリカ農業の健康さや経営者たちの誇り高さや逞しさを感じられた。また、日本にいての手前勝手な思い込みとは裏腹に、沢山の問題を抱えながらもアメリカという国そのものが持つ自己再生能力を垣間見たような気がした。

僕の感想は、初めての海外旅行者にありがちな旅先への過剰な思い入れが支配しているかもしれないが、以下、僕のカリフォルニア農業印象記を何回かに分けて書いてみる。 昆 吉則

カリフォルニア農業の背景

カリフォルニア州の面積は日本全土より広く、州の南北に広がる広大な内陸平原地帯を中心に、250品目以上の多様な農産物を生産する農業地帯である。カリフォルニア州の農地面積は1350万ha。そこに7万戸の農家があり、平均は何も語らないかもしれないが1戸当たりを割ると、1戸当り面積は約190ha。単純に日本の平均と比較すれば160倍である。

今回、訪ねたのは、内陸のサクラメント・バレーと呼ばれるサクラメント平野を中心とした地域、その南のサン・ホーキン・バレーと呼ぶストックトン、フレズノなどの中部内陸地域。そして北部海岸地帯の野菜生産地帯サリナス、ワトソニビルである。

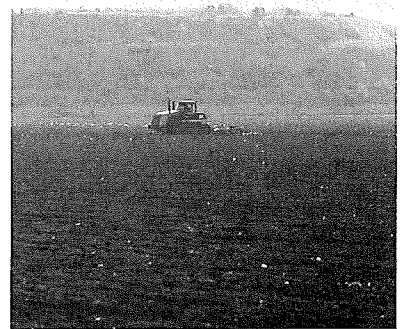
8月だというのに海風と霧で日中でも心地よい気候のサンフランシスコ市内を出て、海岸山脈と呼ばれる丘陵地帯を越えると、気候は一変する。東のシエラネバダ山脈までのビッグバレーと呼ばれる広大な平原である。そこは日中の気温が40℃を越す土地だ。でも、乾燥しているため木陰に入ると暑さはさほど感じない。

夏の間、自然のままの原野は草がすべて枯れ上がり、その枯草色の中に点在するカリフォルニア・オークの灌木が唯一の緑という景色が広がる。その分だけ、灌漑された農地の緑、そして住宅の庭や都市に栽植された芝生や木々がことさらに鮮やかだ。カリフォルニアでは、すべて緑は、灌漑による人工の緑なのだ。

農業だけでなくカリフォルニアのあらゆる産業として豊かな暮らしは、大規模な水利開発事業がそれを成り立たせている。生命線である水を確保するために、遠くシエラネバダ山系の雪解け水を引き、高地の人造湖に限られた川の水をくみ上げ、何度もポンプアップを繰り返しながら、ほぼ本州の全長にも及ぶような千数百キロ先のカリフォルニア南部地域まで水を送っている。巨大な運河や灌漑ダムの建設があつて、カリフォルニアの現在はあるのだ。

水源に近い北部地域と南部とは、買水の水の値段が10倍以上も違う。1エーカー(40・469a)の畑に1フィート(30・48cm)の深さに貯める水の量を示す単位「1エーカー×フィート」の単価が、北部地域の30ドル前後から南部や運河から遠い地域では350ドルから400ドルという価格になる。文字通り水を買ってする農業なのである。しかも、その水は生活用水から都市の維持管理、工業用水と分けあつて使うわけで、冬季節の雨や山間に降雪の少なかつた年には水不足になり、農業生産も抑制される。

しかし、土地は肥沃である。チソとカリ、あとは必要に応じて微量要素の施用だけで済むような土である。乾燥した大地は、多湿の日本と比べれば比較にならないほど病気や害虫の発生が少ない。雨が降らないからこそ、灌漑設備さえあれば工場生産のように計画的に作業手順が組める。その中にありとあらゆる果樹類、酪農から畜産を含め、ほとんど農業の展示場のように250品目以上の作物が栽培されている。そして、カリフォ



アメリカではゴムクローラートラクタ「チャレンジ」の時代が始まっている？

ルニアは米国内においても圧倒的な農業生産額を誇る農業の州である。

カリフォルニアの農場経営には、いろいろの形がある。たとえば、農家が自らの土地で農業経営をする以外のケースとして、農場を持つオーナーが単年度契約の現金貸借あるいは収穫物の分配によって農家にリースする場合、または、果樹栽培などでは専門技術と経営能力を持つ個人や企業、協同組合が何人かの地主の土地を一定期間の契約で請負う場合など、さまざまである。

そうした経営を支援するために、カリフォルニア大学農学部は指導管理下にある農業改良普及事業が、極めて実践的かつ有効に機能している他、農場経営管理の専門会社や農地評価や技術サービスコンサルタント、コントラクターなどが各種のサービスを提供しているようだ。

アメリカの集約農法と日本の粗放農法

バスでの移動中、僕は窓から見える景色に釘付けになっていた。

そこに見える景色が、あたりまえのこ